

# ナイチンゲール — 精神的危機から自立へのプロセス

— 真実の目は真理の探究につながる —

広島文化学園大学看護学部  
佐々木 秀 美

**論文要約** 本論では、前稿における検証結果を踏まえて、精神的危機からと自立までのプロセスを通して、行為の源としてのナイチンゲールの思想をさらに探究した。神秘主義と科学主義の交差するイギリスの教育思想の影響を受けたナイチンゲールは、成長・発達段階において、神の存在と日常生活の様々な現象とが、神との一体感の中で生まれるものであると感じ、真実の目は真理の探究につながると考えた。その考えは、イギリス経験認識論日常生活における様々な現象を原因と結果の関係において解釈しようとする科学主義的要素と相まって、全て実際に起きている現象を科学的な目で観察・認識しようとした。その真実の目と真理の探究が彼女をして、批判のみならず一歩進んで、自身の取るべき行為を導きだした。彼女の主張は急進的であり、伝統的な社会規範を覆すものであった為に、家族との対立、精神的危機状況を作り出したが、その状態を克服したときにナイチンゲールは人間としての強さを獲得し、自立へのプロセスを踏んだ。彼女の思想の背景には人間存在の問題として人格と生存権の問題があった。

**キーワード：**ナイチンゲール、伝統的な性役割、精神的危機、女性の自立、看護師

## ■ はじめに

いかに偉大な人物でも、その価値や信念は、多くがその育った家庭環境や信仰、教育を受けた人の考え方、また、その友人などからの影響を受けている。幼少時期から、大人への段階で個々人は、様々な経験をし、その経験を糧としてたくましく生きるか、あるいは危機的状況に陥り絶望するかは個人が元来有している資質と周囲からのサポートによる。自我の確立、それは青年期までの課題である。その課題を達成した時、人は自己の能力の認識と共に自己尊重ができるようになる。自己尊重は又、他者尊重へのプロセスであり、集団における相互作用と同時に社会的適応のプロセスへと進む。この社会的適応のプロセスにおいて、人間として自己決定を有する無限なる存在として的人格が与えられる。イマヌエル・カント<sup>1)</sup>の哲学における存在としての人間の価値がそこにあ

り、人間社会の中で、相互に尊重される存在となりえる。

前稿の『ナイチンゲール教育思想の源流』<sup>2)</sup>では、看護教育の母として、あるいはクリミアの天使として、あるいは世界の理想的人物像として知られるフロレンス・ナイチンゲールの、その行為がいかなる思想から生み出されたのかについて、まずは、ナイチンゲール家の家族構成とその文化的・価値背景、ナイチンゲールが受けた教育、ヴィクトリア女王治世下のイギリス社会とイギリス労働者階級の実態、イギリスにおける宗教とナイチンゲールの宗教的感化、伝統的な女性の生き方などを検証した。

ナイチンゲールが望んで止まなかった理想的な生活、それは良いものをどこまでも追及し、大きな目的に一心不乱に従事し、優れた理想と高邁な感情に対して共感する気品ある計画を持った生活であった。それは伝統的な規制の中で、与えられ

た役割をそのまま柔順に受け入れ、男性の力に頼って生きていくのではなく、自分の一生は自分で責任を持つという事であった。そこには彼女自身が日常生活で経験したことから導き出された女性の人格の問題があった。その早すぎる目覚めは、いくつもの闘いを生じさせた。その状況を改善したいと考えたとき、上流社会の伝統的な規範は厚い壁であった。そこで、ナイチンゲールは家庭生活の無為さを非難し、上流社会の女性達の伝統的な生き方を非難し、それを受けいている女性たちを非難し、女性であっても高い理想を持って生きるべきであると主張した。彼女の姿勢は今日起きている現象をそのまま受け入れるのではなく、科学的な根拠を持って物ごとを観察し、問題を認識し、目指す目標を明確にし、問題の改善を図り、変化させていこうとする姿勢である。

イギリス経験認識論を引き継いだと考えられるナイチンゲールは、そのこまやかな観察と鋭い洞察力で持って、当時のイギリス社会の現状を鋭く見抜き、批判した。不潔な社会環境、病院内における粗悪な看護、貧困で無知な労働者階級の人々と家庭内における女性の位置づけなどについて言えば、宗教的信条で培われた自分の高い価値規範と正義感はあるべき姿を明確にした。

ジェレミー・ベンサム<sup>3)</sup>の「女性の幸福と利益は男性のそれと同等である」<sup>4)</sup>との考えを継承していた父親のナイチンゲール氏<sup>5)</sup>同様、ナイチンゲールは自身の経験から特に女性の問題には敏感であった。自分が看護師になろうとの意を決し家族に打ち明けた瞬間から、家族との対立が始まったのである。人間の基本的な人権である幸福追求権は女性にもある。女性が自己の生涯を考えた上で、自分でその生き方に対して責任を持ち、自分で自己の一生に対して計画を立て、その中で生じる生活事象上の問題を、自己の力で解決していくことができるようになった時始めて、女性は自立できたのであり、人格を持つことができるのであった。

そこで、本稿ではナイチンゲールの生涯において、自身の主張と対立する家族との闘いから自立へのプロセスを通して、行為の源としてのナイチンゲールの思想をさらに探究する。

## ■ 伝統的な性役割への反発

良妻賢母主義が主流のイギリス社会において、裕福な家庭に育ったナイチンゲールは、その家族

背景及びその友人・知人達との幅広い交友を通してあらゆる思想的・学術的学びができる環境が整えられていた。しかし、『ヴィクトリア女王』<sup>6)</sup>や『イギリスにおける労働者階級の状態』<sup>7)</sup>にも記述されているように、当時のイギリス社会では人々の倫理観の低下が顕著であった。

島国であったイギリスの宗教的・社会的・政治的変動は、プラトン主義の新たな復活を促し、フランシス・ベーコン<sup>8)</sup>の主張する、人間理性の働きに基づく経験論的認識論が出現した。その後、真理と善なるものとは究極的に一致するとの立場を探究するケンブリッジ・プラトニスト(Cambridge Platonists)たちが出現し、プラトン主義とキリスト教とを結びつけ、宗教的対立を解決する手段にしようとした<sup>9)</sup>。ジョン・ロック<sup>10)</sup>の哲学は経験論的認識論の立場であるが、この立場である合理主義的思考が、哲学の分野から自然科学の分野に広がるにつれて、伝統や宗教的制約から脱却して個人の合理的・主知主義的判断に基づく自由の要求が高まった<sup>11)</sup>。これら19世紀イギリス社会の価値規範の多様性は、他方において宗教的混乱を招き、道徳的退廃につながったのである。

ヴィクトリア朝時代のイギリスは、世界を支配し意気盛んな時代であり、その裏には様々な問題や思いが混沌としていた。フレデリック・ウィルヘルム・ニーチェ<sup>12)</sup>の“神は死んだ”の表現からも伺えるように、伝統的形而上学を幻の背後世界を語るものとして堂々と否定された。その影響は、実存主義やポスト構造主義にも及び、イギリス文化の新たな方法を模索しなければならない状況にまで至った。そして、思想や芸術の分野での困難と苦渋は、西欧19世紀末の精神世界に極めて大きな衝撃を与えた。これは、現象を超越し、その背後にあるものの真の本質、存在の根本原理、存在そのものを純粹思惟により直感で探求するのではなく、時間・空間内にある個体的存在として本質を現実化していく科学時代の到来を意味する。

マシュー・アーノルド<sup>13)</sup>の『文学とキリスト教義』<sup>14)</sup>には、科学思想の洗礼を受けたイギリス国民が、従来から受けてきた天国や地獄、永遠の命などはありえないといったことや、宗教と道徳の関連性などが論じられるようになったと記述されている。彼は、本来、実践のための書である『聖書』を、「聖書にはありもせぬ科学と、難解な形而上学と誤認した」<sup>15)</sup>と述べ、聖書を本来あらぬものとし、聖書の中に本来あらぬものを注ぎ込も

うとしたと述べている。その結果、彼は実践が科学と教養の欠如のために阻害されたと結論付けている。そして、マシューは、著作全体を通してキリスト教における実践の有意性を強調した。

多様な宗教と科学時代の到来の洗礼を思いきり受けたナイチンゲールは、成長・発達段階において、信仰こそが魂の真の目であり、耳である<sup>16)</sup>と述べた。神秘主義的要素が強まったナイチンゲールは、神の存在と日常生活の様々な現象とが、神との一体感の中で生まれるものであると感じ、真実の目は真理の探究につながるというのが、彼女の導き出した結論であった。それはまた、当時の宗教に対する社会の認識を否定し、キリスト教を受け入れながらも、彼女独特の宗教観を生み出す契機にもなった。自身の望んだ理想的生活、つまり、それはキリストの教えを実践する神の僕としての生き方であった。マシューがキリスト教における実践の有意性を強調したように、ナイチンゲールにおけるキリスト教的愛の実践が看護であった。

ナイチンゲールが、当時の女性達と同じように生きられないという考えを持ったのは極めて早い時期であったが、明確な形で看護師になろうと考え、意志表出をしたのは1841年である。ナイチンゲールが自己の理想に基づいて看護師になりたいとの意志を家族に打ち明けて以来、家族との対立は激しかった。なにしろこの当時、看護師と言えば“売春婦”と同じような意味にとらえられていたのである。上流社会の当たり前の常識を持つ家族との対立はひどく、彼女はいろいろな方法で、家族との合意点を見つけ出そうと苦しんでいた。同じ女性でありながら伝統的な性役割を受けいている母親や姉とは大きく違っていた。それは、上流社会の婦人達の役割である社交界の華やかな雰囲気にならなかつたのかもしれないが、彼女の知性がそれを許さなかつたとも言えるであろう。

上流社会の生活は女性ならば誰でも憧れるものである。今日の子供たちができるだけ良い服を着、良いものを持ちたいと願う心境同様、当時の子供たちも今の自分よりできるだけ良くなりたいと願っていたであろう。しかし、彼女は上流社会の規範を受け入れ、社交に明け暮れる上流社会の夫人たちの生き方には疑問であった。権利や義務には無関心で社交に明け暮れている女性達に対してナイチンゲールは「知性の足だけが前に進んで来ているのであって実践の足は後ろに残ったままの

状態である。その意味で女性は斜めにたっている現状なのである。即ち、行動の為の女性の教育は知識の為の教育と足並みを揃えていない。」<sup>17)</sup>と考へた。

上流社会の人達が高い教育を受けていても、それを何等社会に役立てるわけでもなく、ただ、お互いに“知っている”事をひけらかし、競争するだけの為教育を受け、知識を集めていることが非常に無意味であるとナイチンゲールは考へた。彼女が父親に宛てた手紙に書いた様に、理論 (theory) と実践 (practice) は一致していなければならない、知識 (knowledge) と行動 (action) とはバランスが取れていなければならない。そして、ナイチンゲールは自分の知性を活用して働きたかつた。ナイチンゲールの考へでは、勤勞の精神こそが自己を守る唯一の手段であった。男性にしても女性にしても自分の力で生きていく必要があり、それは健全な勤勞の精神でもたらされるものであつた。ナイチンゲールにすれば、男性との結婚によって生活の基盤を持つ女性の生き方は、“寄生生物”に似たような生き方に思えたのかもしれない。

ナイチンゲールは『見習い生への書簡』の中で、「私たちは、植物や動物で、他者に寄生して生活し、自分の食物のために自分で働かないで、そのうち退化して行く“寄生生物”がどんなものであるか知っています。」<sup>18)</sup>と述べ、こうした寄生虫のような人間にならないようにしようと忠告している。貴族階級の生き方に関しては『ヴィクトリア女王』にも記述されているが、自分で働くことをしないで、力のあるものに頼って寄生するのである。人は働き、自分の力で生きていくことこそ自立しており、尊敬に値する。ナイチンゲールによれば伝統的な女性の生き方、即ち、男性に依存して生きている女性達もこの“寄生生活者”の範疇に入ったのである。これは単に貴族階級の生き方に対する批判であるのみならず、男性に頼って生きている女性の生き方をも批判していると考えられるのである。

ヨーロッパにおける伝統的な社会規範によれば、女性は家庭内にとどまるべきであつた。そして長い間、受け入れられてきた家庭内における女性の役割は強固なものであつた。無力な弱者として男性に支配、あるいは保護される代わりに、自

分の人生に決定権を持たない女性の生き方は、ナイチンゲールのような知的な女性にとって苦痛以外の何ものでもなく、美德とはほど遠い状況にあった。上流社会の多くは労働者の血と汗の結晶を吸い上げて華やかな生活をしている。ところが労働者階級の、特に女性たちには生きていくための過酷な現実があった。いずれの階級の女性たちも無知に近く、その生き方は到底受け入れられるものではなかった。

女性に知性はいらぬ教育は日本のみの固有文化ではない。女性に知的探求心を授ければその夫に理屈を捏ねる事のみを覚え、夫に従うことができなくなるから、女性に教育を受ける必要はないという考え方はヨーロッパ全体に浸透していた。1681年に『女子教育論』<sup>19)</sup>を著したフランソワ・ド・サンヤック・ド・ラ・モード・フェヌロン<sup>20)</sup>はフランスの聖職者作家である。彼は、子供を育てる女性こそ教育されるべきであると主張した。このフェヌロンの教育論が本格的な良妻賢母主義教育の発端であると考えられている。18世紀に入って、フェヌロンの女子教育論に影響を受けて女子教育を開始したといわれるハンナ・モア<sup>21)</sup>は、良妻賢母主義思想に基づく教育観であった。この思想はイギリスの伝統的な女子教育論に発展し、浸透した。そして、その思想は明治維新以降、わが国にも伝えられた。

他方、18世紀の後半、新しい女子教育論が登場していた。ロックの理性教育論を女性にも適用しようとしたメアリ・ウルストンクラフト<sup>22)</sup>は、女性に対して教育を与え、精神的にも経済的に自立させる事が女性の悲惨な状況を克服する事に繋がると考えていた。これに加え、19世紀に入ってからには当時の女性文筆家達、即ち、ハリエット・マーティノウ<sup>23)</sup>、ジョン・スチュアート・ミル<sup>24)</sup>の妻になったハリエット・テラー<sup>25)</sup>やシャーロット・ブロンテ<sup>26)</sup>の様な女性文筆家達は女性の権利を主張していた。彼女たちに加え、イギリス女性としてアメリカで初の女性登録医となったエリザベス・ブラックウエル<sup>27)</sup>の様な極少数の女性達以外には、権利に関して男女間に差異があることに気づいていなかった。男性のみならず女性のほとんどがこの女性に与えられた伝統的な性役割を矛盾としてではなく、ごく当たり前の事として受け止めていた。

ナイチンゲールが生まれながらにして与えられた恵まれた環境を否定し、女性として誰もが受け

いれている女性の役割を否定して働きたいなどという事は、当時としてはやはり変わっていた。上流社会のあたりまえの常識を持ち、その慣習を受け入れていた家族にとって、ナイチンゲールの考えは到底、受け入れられることではなかった。家族にしてみれば、この子はなんて奇妙な考えをするのであろう。何とか考えを変えさせねばと必死の抵抗を試みたであろう。そして、ナイチンゲールも又、強情なほどその信念を変えることは無かったのである。「いったい何の為に、他人の目、他人の勝手な期待、他人の意見などに悩まされる必要があるのでしょうか。自分のやりたいことをやらないで、他人から言われるままに生きた人で、優れたこと、有用なことを成し遂げた人は、いまだかつて誰もいないのです。」<sup>28)</sup>とナイチンゲールは述べている。

ナイチンゲールが看護師になりたいとの希望を表明して以降、その冷ややかな、あるいは過激な家庭内闘争は長い年月におよび、互いの神経を苛立たせる深刻な問題であった。ナイチンゲールが恵まれた環境を否定し、女性の伝統的役割を否定し、しかも労働者階級のように働きたい、しかも看護師などという呪われた仕事を選ぶなどという事は、家族にしてみれば理解しがたく、体面的にも許しがたい考えであった。家族との対立はひどく、いろいろな方法で合意点を見出そうとナイチンゲールは苦しんだ。そして反発もした。憧れや希望、当て外れや失望などは全て手帳のなかに注ぎ込まれた。長期間にわたる家族の執拗な反対は、ナイチンゲールの神経をすっかり磨り減らしてしまい、ベッドに伏せる事が多くなった。

## ■ カイゼルスウェルト学園で看護師として学ぶ

ナイチンゲールが、ドイツのカイゼルスウェルト(Kaiserswelth)学園で学んだのは、1850年のことである。彼女が看護師になりたいとの意思表示をしてから、十年の歳月が流れていた。家族との対立で神経を病んだナイチンゲールは、ベッドに伏せる事が多くなった。衰弱していくナイチンゲールを心配した友人のブレースブリッジ夫妻<sup>29)</sup>が、彼女の気持ちを汲んで家族に内緒で計画したものである。カイゼルスウェルト学園は、1837年にテオドル・フリードナー牧師<sup>30)</sup>によって設立された施設である。“婦人執事”(ディアコネス Deaconess)という病人や貧乏な人々への奉仕活

動をする婦人団体の組織があり、これに関わる女性達を教育するのがその主な目的であった。ディアコネス達にとってこの学園は“母の家”となっており活動の拠点でもあった。ナイチンゲールが著作『カサンドラ』で記述している様に、イギリスではエリザベス・フライ女史<sup>31)</sup>がこうした組織を通じて既に活躍していた。同学園では囚人たちの更生施設としての機能も持っていたが、看護師や教師の教育も行っていた。

ナイチンゲールはドイツに看護師の教育を行っている施設があることを、ブンゼン・ヨジラス男爵<sup>32)</sup>から送られてくる資料によって知っていた。ブンゼン男爵はプロシア大使であり、ヴィクトリア女王やアルバート殿下<sup>33)</sup>の友人でもあった。彼はエジプト学者としても有名であった。ナイチンゲールが彼と初めて出会ったのは彼女が22歳の時であり、それは、女王夫妻主催の晩餐会であった。恐らく彼等は知り合ったとき、病院の衛生問題等を話題にしたのであろう。ブンゼン男爵はそれ以降、ナイチンゲールにカイゼルスウェルト学園の年報のみならず、病院の衛生に関する諸外国の資料を送付したと『フロレンス・ナイチンゲールの生涯』<sup>34)</sup>には伝えられている。しかし、ここでの教育を見聞する機会は得られていなかった。

ミセス・ブレースブリッジ<sup>35)</sup>はメアリー・クラーク・モール<sup>36)</sup>を通じて知り合った女性である。夫のブレースブリッジ氏は、ギリシャ解放運動に傾倒している人物であった。ブレースブリッジ夫妻には子どもがおらず、彼等の生活の中心にナイチンゲールを据え情愛を注いでいた。後のことであるが、夫妻はナイチンゲールがクリミア戦争に従軍した際にも同行し、彼女の仕事を手伝っている。ナイチンゲールの精神状態を心配したブレースブリッジ夫妻は、1847年にまず、ローマへの旅に彼女を連れ出した。ローマはナイチンゲールの生地であり、懐かしい場所であった。この旅行はナイチンゲールの病んだ精神をすっかり回復させた。又、この旅行では、新たにシドニー・ハーバート<sup>37)</sup>夫妻と知り合いになった。彼等はナイチンゲールが看護師になりたいという意志を伝えると大いに感激し、必要な時は協力を惜しまないことを約束してくれた。幸運にもシドニーという人はトーリー党に属している政治家であった。彼は病院の状況改善に非常に強い関心を持っており、ナイチンゲールの目的とも一致していた。

余談であるが、政治家にとって所属している政

党は理念達成に大きく影響する。イギリスには当時、ホイッグ党とトーリー党の二大政党があった。ホイッグ党というのはチャールズ二世<sup>38)</sup>に象徴される王政復古時代に組織され、初代の指導者はアンソニー・アシュレイ・クーパー・シャフツベリー伯爵<sup>39)</sup>である。宗教的な要素からは国教会派である。出身階層では大地主を中心とした騎士の流れを汲む政党であり、女王の側近政党である。ヴィクトリア女王が即位した頃のイギリスでは、ウィリアム・ランブ・メルボン卿<sup>40)</sup>率いるこのホイッグ党が内閣を組織していた。ナイチンゲールの父親もホイッグ党の黨員であり、ヘンリー・ジョン・テンブル・パーマストン卿<sup>41)</sup>を支持していた。

トーリー党は宗教的には非国教会派、中規模の地主や新しく出現したジェントリーを中心とした政党である。メルボルン卿の後にロバート・ピール卿<sup>42)</sup>率いるトーリー党が内閣を組織した。トーリー党のメンバーであったシドニーは、クリミア以降のナイチンゲールの、一連の改革に関して協力を惜しまなかった人物であり、彼なしでは改革は実現できなかったといっても過言でない。クリミア戦争当時はホイッグ党が政権を握っており、ナイチンゲール家の隣人であったパーマストン卿が内閣を組織していた。しかし、パーマストン卿は陸軍大臣の他に臨時の戦争大臣のポストを設け、その椅子にトーリー党のシドニーを座らせたのである。クリミア戦争におけるナイチンゲールの従軍も、その瞬間の、その瞬間に居合わせた人の、その瞬間の決断がなしたものである。

自身の目的と一致している人々と将来の夢を友人たちと語る時、ナイチンゲールの病んだ精神はすっかり蘇った。しかし、家族の下に戻り、家族との執拗な反対に闘いを挑むとき又、彼女は病みはじめた。ブレースブリッジ夫妻は1849年に再び、ナイチンゲールを旅行に連れ出した。この旅行ではエジプトやギリシャを巡った。この旅行も終りになった1850年、ブレースブリッジ夫妻はナイチンゲールはをドイツのカイゼルスウェルト学園へと向かわせた。この計画は、ナイチンゲールの家族には内密で進められたものである。

思いがけない友人達の計らいでドイツのカイゼルスウェルト学園に学ぶ事ができたナイチンゲールは、その繊細な観察力と洞察力で看護師の教育方法を見聞した。カイゼルスウェルト学園の看護教育実践の方法については、1851年にまとめた『カ

イゼルスウェルト学園によせて』<sup>43)</sup>の中に書き留められている。ナイチンゲールが実際、体験したカイゼルスウェルト学園では看護師と教師の教育が同時に行われていた。いずれも短期間の教育であり、教育方法としては未成熟な段階であった。が、しかし、ナイチンゲールは学園の「キリスト教的愛のやさしさや明るさ繊細さ、一口に言えば、道徳的雰囲気」<sup>44)</sup>に魅了された。ともかく短期間ではあるがこの学園での質素で堅実な生活は、ナイチンゲールの磨り減った精神をすっかり健常にした。この経験は女性にも職業を与えれば神経症にならず、生き生きと暮らせるのだという確信を彼女に与えたに違いない。しかし、時はまだ熟しておらず、この後、自立までの2年間、ナイチンゲールは苦渋の人生を歩まねばならなかった。“19世紀は女性の世紀”に始まる『カイゼルスウェルト学園によせて』はナイチンゲールの宣戦布告とも思える。

## ■ 精神的危機と危機からの脱出

自身の目的と一致している人々と将来の夢を友人たちと語る時、ナイチンゲールの病んだ精神はすっかり蘇った。しかし、家族の元に帰るとナイチンゲールの精神は、又、病んでしまうのであった。家族との対立、不安と焦燥感の毎日は彼女の精神を切り裂くばかりであった。ナイチンゲール自身、家庭生活は囚われの身であり、“カサンドラ”同様な生活であると感じた。“カサンドラ”という女性は、『ギリシャ神話』に登場するトロイ軍のカサンドラ王女のことである。戦争に負けたカサンドラ王女は敵に捕えられ、奴隷としてギリシャ軍に連れて行かれ、辛酸をなめた。ナイチンゲールは、『ギリシャ神話』に登場するカサンドラ王女同様に、自分は家庭内の奴隷であると考えた。狭い家庭は閉塞感があり、監獄同様であった。彼女の精神は広い宇宙に自由に飛び出したいと欲していた。何もしないで無為でいること事態、苦痛であり不安であった。

中でも沸き上がる不安というものは打ち消しても打ち消しても沸き上がってくるものである。現実的な解決は、その原因の消滅にある。がしかし、これが原因であるといいきれない焦燥的な不安もある。“不安”この打ち消そうとしても、次から次へと浮かんでくる妄想にも似たこの現象は極度になると人の精神を脅かす。ゼーレン・キルケ

ゴール<sup>45)</sup>は、「本当に不安の詭弁に対して武装し得る唯一のものは信仰である」<sup>46)</sup>と述べている。しかし、神との対話だけでは拭い切れない部分もある。念じれば問題は解決するのか？人には信仰によって救われる不安もあるが、神に祈る事だけでは解決しない問題もある。人にとって不安の原因となっているもの、その要因は画一的なものではなく個人差がある。それ故、その原因を追究しそれを取り除く事が不安に対する根本的な解決法である。ナイチンゲールの場合、それはつかみ様もない不確実なえたいの知れない内的衝動に対してであった。幼い頃から神の啓示を受けたと述べるナイチンゲールは非常に感受性の強い女性であった。人と同じ様に考え、人の考えを素直に受入れ、人と同じ様に生きられない自分、そうした自分に対する周囲の反応に対する怯え、説明のつかない感情、こうした感情がナイチンゲールを不安にさせたと思われる。『カサンドラ』<sup>47)</sup>での彼女の告発は、言い様もない不可解な、尚かつ何かにつき動かされる内なる魂の叫びであろう。

彼女の病んだ精神を健常にしたのは家庭外の環境であり、カイゼルスウェルト学園での労働であった。自己の身体を精一杯使って労働に従事した時、ナイチンゲールには生きている実感があった。そして自分も何かに役立つという確かな手応えがあった。彼女が体験したように“不安”というものからの解放、それは何か社会に役立つといったような目的のある活動の中でのみ消しされたものであった。「いったい何の為に、他人の目、他人の勝手な期待、他人の意見などに悩まされる必要があるのでしょうか。自分のやりたいことをやらないで、他人から言われるままに生きた人で、優れたこと、有用なことを成し遂げた人は、いまだかつて誰もいない」<sup>48)</sup>と自分の人生への選択は自身で決定するべきであると述べた。ナイチンゲールの心は将来への希望と実現不可能な現実の間で葛藤し・絶望していた。

1850年12月30日付けの『private note』に、「おお、倦怠の日々よ、何時、はてるとも知れぬ夕暮れよ。いかに長い歲月、私はあの客間の時計を見つめては、あの針は決して十時にはならないという気がしていたことだろう。そして、この先、20年も、30年も同じ思いで過ごす事であろう。31歳になって、私に望ましいものはただ死あるのみ。」<sup>49)</sup>とナイチンゲールは書いた。いつまでも進まない時計の針、永遠に続くであろう恐怖、いやそれ以

上にもっと多くの時間を何もしないで過ごすかも知れない恐怖、絶え難い義務、そうした毎日は死ぬ事より苦痛だったろう。この頃のナイチンゲールは、ギリシャ神話における悲劇的な王女カサンドラと同様であり、精神的危機状況は最大であったと思われる。ナイチンゲールは「自由よ、自由よ、おお、神がみしい自由よ、ついにやってきたのですね、この日の来るのをどんなに待った事か！ おー！ 美しい死よ！」<sup>50)</sup>と死に対して憧れのような期待感を持つようになった。

しかし、彼女の内なる魂は既に行動へと着実な足跡を刻み始めていた。女性の身でありながら自分も何か社会に役立ちたいという考えは、当時に於いては途方もない考えであったが、結果的には女性の社会的位置づけの低さに気が付き、社会の矛盾に気づかせることに繋がった。家族間の多くのトラブルに対処している間に多くの期間が過ぎていたが、この無駄に思える程の多くの時間は決して無駄ではなかったのである。ナイチンゲールは次第に自分を取り戻し冷静になっていった。1852年に、彼女が父親に宛てた手紙には「若い頃の未経験故の失望について語るとき、私はいまではやむをえない事としてそれを消極的に耐えるのではなく、無限の知恵、そのものである神の美しい取決めとして積極的に受け入れることをお伝えしたいと思います。そうした取決めは私たちを神のように新たに創造することは有り得ませんが、さりとて動物にすることもありません。それ故、人間が自身の経験によって人間らしくあるようにという神のご意志、これは誰も逆らうことのできない完全に善なる神のご意志なのです。」<sup>51)</sup>と書いている。32歳の誕生日を機に自己の存在感を認め、生きるという実感を味わった。

自身の経験から人間らしくあれという神の言葉は、ありのままの存在を認める人間存在の問題である。自分に与えられた環境に居つつ、その環境を打破し、自己の将来に向けてその道を切り開くこと、それはそうした能力を有した人なら容易にできる。“たたけよ、さらば開かれん”は神の言葉であり、神のご意志であった。ナイチンゲールは自己の環境の中で、見えざる世界の神との交流の中で、一つの結論に至ったのであろう。しかし、全ての者がそうできるわけではない。与えられた環境に甘んじ、苦悩に満ちた生活を送っている者が多く存在することは、後々認識できた問題であった。

そして、人間らしくあるという事は通常、自己の意志を持つことであり、その意志によって何らかの決定を為し、その決定にしたがって責任ある行動が取れることである。ゆえに、人間らしくあるという事は人格として扱われことであり、人としての権利を有する事である。逆にナイチンゲールのいう動物とは意志がなく、無目的に与えられるだけの人生を送る者のことである。人間は考える行動するものであり、その人の一生はその個人のものである。その意味では弱者として位置づけられ保護されていた女性や子供、病人、それぞれが人格をもっているという事である。考えに考えた末にナイチンゲールは、人が人間らしく生きること、自分の信条にしたがって生きるということは至極当然の事であるとの結論に至ったのであろう。自然がその人に与えた環境の中で消極的に耐えるのではなく、積極的に自分の意志を受入れ、実行する事、それが神の意志であるという信念に至たり、その信念を貫き通そうとした。

## ■ 婦人病院の監督官として働く

ナイチンゲールが女性として人間として何か社会に役立ちたいという考えは、当時においては途方もない考えであった。この実現の困難さが、結果的には女性の社会的位置づけの低さと社会慣習の矛盾に気づかせることに繋がった。これらは女性に対する根強い偏見と蔑視からのものであったにしても、この考えを払拭するためには女性が社会で有用であるという証明が必要であった。その証明こそが女性の役割を拡大する事に繋がり、女性が一人の人間として理想的な生き方を追及する事ができるのである。ナイチンゲールは『カサンドラ』で当時の中・上流社会の女性達が、自己の生活を調整する力も持たないでいると告発したが、彼女自身も友人の協力があって初めて実現できたのである。彼女の計画した理想的な生き方を実現するという問題に関して、一番の壁は上流社会の伝統的な性役割であり、社会規範であった。当時の女性達が受けいれている“愛のない生活と目標のない日々の活動”は、彼女にとって耐えられない事であった。家族との長い対立は彼女の神経を脅かしたが、しかし、その強情ともいえるほど忍耐強さは彼女を勝利へと導いた。

1853年になって家族がやっとナイチンゲールの独立を認めてくれた。父親は彼女に独立資金とし

て年500ポンドを支給するよう手はずを整えた。当時の500ポンドという金額は、現在の日本円に換算すると3,000万円位になる。ナイチンゲールの父親は地方貴族の家系であったが、大学時代から年間、8,000ポンド程の収入を得ていた。この収入は年々、計り知れないほどに増加しており、ナイチンゲールが自立した頃は10万から20万ポンドになっていた。そうした豊かな財政の中での500ポンドの捻出は決して多くはない。現在、月々10~20万円の収入のある父親が自分の娘に500円の小づかいを渡しているのと同じである。しかし、女性の私有財産が認められなかったこの時代、それは父親による特別な計らいであり、特権階級の女性であった証しでもある。何よりも労働者階級の人達が、月々約1ポンドから2ポンドで生活していた時代にあってはかなりの大金である。しかし、彼女は常にこの規定の金額以上に散財したといわれている。実際、彼女は困っている人を見ると黙っていられない性格をしており、クリミアや他の活動で多くの自己財産を使っている。まさに誰の承認も受けないで彼女の存で使えるこのお金の存在は、ナイチンゲールの活動が円滑に進む潤滑油であった。

看護師として働く事を決めていたナイチンゲールは、ハーリー・ストリート街にある婦人病院の監督官の任務に就くことになった。それはホームレスの婦人達や病気になったガヴァネス (Governess 家庭教師) たちのケアをする小さな施設であった。この施設はハーバート夫人<sup>52)</sup> に代表されるような上流夫人達によって組織・経営されている病院であった。資本主義社会に転じたイギリスでは、資本者と労働者間の経済的な差異に著明なものがあつた。そうした中で博愛主義運動と呼ばれる運動が、宗教家や貴族階層などによって行われていた。博愛主義運動は、ノーブレス・オブレッジ (Noblesse-oblige) とも言われ、富めるものが貧しいものへ、強者が弱者への思想の実践版である。つまり、婦人病院は弱者保護の立場の、いわゆる“慈善”が目的で設立されていた病院である。

その婦人病院には医学生も品の悪い患者もいないので、ナイチンゲールの様な上流社会のお嬢さんでも勤めることのできる健全な場所であるという事で推薦されたようである。ナイチンゲールは1853年にモール夫人に宛てた手紙の中でその施設について、その患者達というよりむしろ、「苛々

した女性達—(病気の女性達というのがとかくいらつきやすいという事は知っているのですが)—は、支払い能力はある女性達なのですが、ロンドンで知り合いのいない気の毒な婦人達である」<sup>53)</sup>と述べている。“慈善”の持つ意味は受けとる人によって様々であろう。ナイチンゲールが証言するように、“神経症”を患った苛々した女性達の多くがガヴァネス達であった。女性が過酷な状況にある現実を、ナイチンゲールがこのとき直視し、実体験した事は確実である。

女性が一人で生きる為に生活の糧を得るという事、それは途方もなく大変な事であった。機械の導入が多く貧民階級の女性達が労働者として組み入れられたこと自体、問題がなかったとはいえないが、それでも彼女達は働く事を制限されることはなかった。問題は働くことを制限された多くの中・上流の女性達であった。「労働者階級の娘達であれば、売春婦にならぬ限り、どんな低い職業に就こうと世間から白い目で見られることはなかった。なまじ社会で一応尊敬されている職業や階級の親の娘として生まれながら、自活するだけの金銭に恵まれていない女達」<sup>54)</sup>であった。

今日なら職業選択の自由は女性達にも与えられている。しかしながら、ナイチンゲールが体験したように、当時のイギリス上流社会では、女性には伝統的な性役割が与えられており、職業を持つ事などは許されなかった。ところが、女性達が結婚できなかつたり、あるいは不幸にして夫に死に別れたりした場合、彼女達が自己の生活を支える手段は、自己の持つ教育体験を基にしたガヴァネスくらいしかなかった。それは、様々の生活背景を基盤にしたものであり、能力もバラバラであった。この職業に支払われる報酬もわずかなものであり、その経済的な困窮、奴隷じみた生活が将来に対する不安へと波及し、その結果“神経症”を患うという痛ましい状況にあつた。女性が金銭目的で働く事、それは中・上流階級の女性達にとって屈辱以外の何ものでもなく、ましてや人から“慈善”などという名の施しは考えられもしなかつたことであろう。

ガヴァネスというわずかな収入を得るための職業で、屈辱的な生活を強いられていた女性達は、精神的不安から貧弱な生き物に化していた。彼女は知人ビンコフス博士<sup>55)</sup> への手紙の中で「私がそこにいる間に診た症例はほとんどかならずといって良いほど、ヒステリーか癌でした。そこに



いる間、ヒステリーの治療をしている時、非常に珍しい経験を致しました。それまでにも私は精神病患者を何人とも見てきました。教育のある婦人あるいはイギリス婦人で教育の中途半端な人の惨めな社会的地位に対して深い同情の念を私は抱いております。』<sup>56)</sup>と書いている。これらの状況を自身の体験と現実問題から考えたとき、ナイチンゲールは、それは神の要求している真の女性の生き方ではないと考えた。

キリストは山上の崇訓で“野の花をみよ”と弟子達に説いている。これは明日、何を着、何を食べようかと思悩んではいけない。野に咲いた花でさえ、神が与えた自然の中であれほど美しく咲き誇っていられるではないか。神を信じ、物欲を抑え、魂を清らかにすれば、又、あの野の花のように明日もまた咲き続ける事ができるのだという教えである。“山上の崇訓”はキリスト教教義の“唯心論”(spiritualism)といわれる思想の急先峰である。しかし、現実には多くの女性達が明日への不安から“生ける屍”になっていた。

この不安という現象そのものが生じるということ、そのこと事態がナイチンゲールには納得いかなかったのであろう。このような状態は神の望みではない。神がわれわれ女性を“生ける屍”(Dead Body)にするためにお造りになったとは考えられない、神のなさる事は完璧であるはずだ<sup>57)</sup>とナイチンゲールは考えた。

ナイチンゲールは、神のなさる事は完璧であるはずだと考えた。神のなさる事が完璧であってしかも、女性達が何もしないでいるようにできているのであれば、彼女の考えでは、女性達はこれを受け入れるように作られているべきであり、不安な感情等起きるはずはなかった。しかし、現実には多くの女性達が不安な毎日の中でその精神は崩壊したような状態であり、“生ける屍”になっていた。それは生存するために女性たちが為してきた闘いの終末であったろう。このような状況に対する救いは、唯単に修道女会に入って精神を浄化させるようなものではなく、もっと現実的な対応、つまり、女性達がいかに自立して生きて行けるかという問題に対応するべきであった。それは、人間の基本的な人権、つまり、一つ“生存権”の問題がここに存在する。

ナイチンゲールは就任草々、療養環境としての婦人病院の設備や運営に対して委員会と対立することになった。彼女に内在する弱者保護の精神は

新しい環境の中でも遺憾なく発揮された。ナイチンゲールの辛辣な批判精神は施設の弱点や問題を直ぐに見いだした。そして、問題があれば改善しないではいられない。問題をを見つけ出すや否や、彼女の改革の精神は直ぐに行動に移された。両者の基本的な対立点は、委員会が患者の信仰する宗教によって入院の是非を決定することであった。他方、ナイチンゲールが貧しい婦人達の金銭的負担を軽くしたりすることで、委員会側から追及されたりしたことである。これらは父親や友人のモール夫人に宛てた手紙の内容からも明らかである。彼女の改革へ向けての率直な態度には常に賞賛と非難が存在するようだ。

結局、彼女は勝者となり自分の信条にしたがって行動した。「それは大胆な行動であったがしかし、暴動も成功すれば改革なのです」<sup>58)</sup>と述べた。彼女は自分の行動を大胆な行動であったと評価しつつ改革のためには暴動もいとわずであり、目標に向かって邁進する行動主義的要素は一步も譲らない。慈善病院の改革では基本的な問題を解決するために内科の医師に調剤をしてもらう事によって出費の削減を計った。他に療養所の規則、患者の外出、食事の問題等もナイチンゲールが行った改革の一部である。婦人病院での仕事は順調に進み、ある意味で成功であった。この間にもナイチンゲールは地域に設立されている他の病院を訪問して看護師の実態調査に乗り出している。病院看護師—もちろん正規の教育を受けた女性達ではない—の質の悪さ、勤務条件の悪さ等は際たるものがあつた。優れた看護師の養成は直ぐにも必要であつた。しかし、この事に共感する人達は限られていた。そして、就任から1年後の1854年にクリミア戦争に従軍することになったのである。

## ■ クリミアへの従軍

“私は地獄を見た”というナイチンゲールの言葉が示すとおり戦争は地獄への門であつた。婦人病院の監督官の仕事が順調とは言わないまでも軌道に乗り始めた1854年、トルコという東方の地で、キリスト教徒の取扱いに対し、ロシアとイギリスとの間に戦いが起きた。これは一般に“クリミア戦争”と呼ばれている。10月のタイムズ紙に、戦地での兵士達の窮状が報道された。それによれば戦地では軍医の数が足りないだけでなく、衛生材料も不足している。回復を図るような設備も整つ

ておらず、最もありきたりの医療器具さえない。救貧院の病院にも劣るような不潔さの中で、治療も受けられないで兵士が死んでいく有様が掲載された。この報道の最後には、フランスの優秀な看護師達の活躍で締め括られ、いかにイギリス兵士が劣悪な状況下にあるかを訴えていた。この様な事態に大衆の驚き怒りもさる事ながら、人一倍、感受性の強いナイチンゲールが黙っているはずがなかった。彼女はこの兵士達の窮状を救う事こそが、自分に与えられた任務であると考えた。

ナイチンゲールは報道から2日後には、婦人病院委員会のメンバーであるハーバート夫人に手紙を書いている。その内容はクリミアへ自費で従軍したいとの意思表示と、そのことについて委員会が自分の従軍を快く承認してくれるように説得してほしいとの依頼文書であった。ナイチンゲールがハーバート夫人に手紙を書いた翌日、すれ違うように時の戦争大臣シドニーから、ナイチンゲールに従軍看護師として戦地に赴いて欲しいとの依頼文書が届いた。彼の手紙には従来、男子の看護人しか認めてこなかった事実が述べられ、看護師の派遣が必要である事態になっていることを認めたと。ナイチンゲールへの助力が求られていた。更に、シドニーの手紙には「看護師達の人選は大変な難事業でしょう。その難しさを貴方ほど、良く知っている人はありますまい。みるも無残な光景を前にして知識と善意だけでなく、大変なエネルギーと勇気を要する仕事をきちんとやっける女性を見いだすのは至難の技です。彼女達を統率し、規律を保たせるのも容易な事ではありませんまい。特に難しいのは軍医や将官達と強調して円滑に仕事を進めていくことでしょう。」<sup>59)</sup>と述べられ、管理の能力と実地の経験からナイチンゲール以外に適任者はいないとの考えが述べられていた。

シドニーは以前、ギリシャ・エジプト旅行で知り合った際に、ナイチンゲールが看護師になりたい事を知って力を貸してくれると約束してくれた政治家であった。クリミア戦争当時、政権を握っていたパーマストン卿は、陸軍大臣の他に臨時の戦争大臣のポストを設け、その椅子に派閥外のシドニーを座らせたのである。慈善活動の一貫として従軍を申し出たナイチンゲールであったが、結局、戦争大臣の依頼により正式に政府の派遣ということになったのである。手紙にはナイチンゲールの権限が明確に述べられ、現地での彼女達の看護活動が円滑に進むよう手配された。有資格者がいた時代ではなかったため、戦時中の看護師達の働きは一重に彼女の組織力と統率力にかかっていた。看護師の選任はかなりの困難を極めたが、39名の看護師を選任し戦地に赴いたのである。その上、ナイチンゲールのクリミアへの従軍は、当時の宗教問題とも微妙に絡み合い、前途多難な船出になった。それはジョン・ヘンリー・ニューマン<sup>60)</sup>の、オックスフォード改革運動<sup>61)</sup>によって引き起こされた精神的ショックから、立ち直っていないイギリスの社会問題があった<sup>62)</sup>からである。このあたりの問題については既に筆者らが『ナイチンゲールの宗教観—アーサー・ヒュー・クラフとの関わりをてがかりに』<sup>63)</sup>で報告している。イギリスの宗教問題と道徳的退廃による繊細で不安定な国民の感情は、シドニーとナイチンゲールが有している宗派、あるいはナイチンゲールが選任した看護師の宗派などにも矛先が向けられ、攻撃の対象として新聞紙上で熾烈な論争も沸きあがっていた。

■ クリミアにおける兵士のための闘い

当時、陸軍は“女王陛下の陸軍”として相当なプライドを有していたようだ。ナイチンゲール達一行がまず到着して最初に直面したのは彼女達一団が陸軍から拒否されたことであった。シドニーからの手紙で男子の看護人しか認めてこなかった事実を知らされていたナイチンゲールは、軍人の女性に対する偏見<sup>64)</sup>と軍医たちの嫉妬<sup>65)</sup>についてはある程度覚悟をしており、ある程度の行動方針を立てていた。この際、自分たちに必要なのは秩序を保ち、激しい訓練をなし、絶対服従の精神であるとナイチンゲールは考えた。実際、基地では陸軍の規則を盾にとってナイチンゲール達の看護活動を認めようとはしなかった。そして、軍医たちはナイチンゲール達を拒否し、陸軍病院に入る事を拒んだのである。そのため、クリミア軍医総監ジョン・ホール博士<sup>66)</sup>達との対立は相当なものであった。この辺りの闘争は、ストレイチーが『ヴィクトリア朝時代の偉人たち』<sup>67)</sup>で描写した辛辣なナイチンゲール評伝が、我々に最も真実性を伝えてくれる。タイムズ紙の報道を否定する現地の軍医達は、負傷兵の窮状が存在するどころか、全てうまくいっているとナイチンゲール達の看護を一切認めようとしなかった。10年以上も家

族との対立を経験したナイチンゲールである。一度、拒否された位で自分の任務を放棄するはずはなかった。

対立を続けながらもナイチンゲールの冷静な観察は続けられた。バラック病院は建物そのものに構造上の欠陥があった。巨大な下水溝が建物の下にあり、その下水溝に溜まった汚水は悪臭を放ち、上部の床を湿らせ、床は腐りきっており、信じられないほど害虫がうごめいていた<sup>68)</sup>。戦地から送られてくる兵士達は伝染病の者も単なる外傷の者も一緒に収容されていた。病院の混雑の中で負傷兵達は裸のまま、衣服もなく、衰弱しているのにその身体の状態に相応しい食事が準備されているわけでもなかった。切断創はむき出しのまま包帯もなく、適切な手術が成されていない者が多かった。飢えと寒さ、伝染病、出血で兵士達は次々と死んでいった。そうした中でも負傷兵は次々と送り込まれ、その数は多くなる一方であった。「言いようのない汚物の中に彼らが横になったために、それは十分に考えられたことであるが、創傷のある兵士は寄生虫でいっぱいになった。衣服と寝具は共に洗濯するために出された。洗濯物の量が多いとき、その洗浄力の質は、大概悪かった。寄生虫をつけたまま返却される毛布とシャツは洗濯の意味がなかった<sup>69)</sup>。当局は、実際、現地ではシャツの中で這い回る物体を完全に除去するために、煮沸消毒の必要性を感じていなかった。ナイチンゲールは自費で洗濯室を設立し、月々につき2000着の清潔な（本当に清潔な）シャツを供給した<sup>70)</sup>のである。

つぎに兵士達の病気と死の重要な原因として“過密状態”が挙げられた<sup>71)</sup>。1854年から1855年の冬の初めに患者は、病室のみならず通路にも収容しなければならぬほどの混雑状態であった。そういうところでは悪臭が漂い、誰にとっても耐えられなかった。病院内はコレラによる下痢、負傷者の壊疽で空気はよどみ、無差別に兵士達を死の世界へ追いやった。これらの感染症で多くの兵士達が死亡するにも関わらず、病気の者が次から次へ運ばれ、入院患者は一向に減らなかった<sup>72)</sup>。食事は全く悪かった。まずは食材の保存の仕方が悪かった。そのため、キャンプにおける壊血病は悲惨なものであった。12月末までには、歩兵連隊の半分以上が病気で入院中であり、その死亡率は、1665年にペスト流行によって引き起こされた大規模で最悪の死亡率より高かった。翌年の一月だけ

で病院に入院したのは11,290人であり、死亡者数は3,168人であった。この莫大な数の犠牲者の内、915人は、壊血病という不十分な栄養に起因する疾患で死亡した<sup>73)</sup>。明らかに生命に不可欠な原則が不足していた。その結果、我々の兵士は死亡した<sup>74)</sup>のである。ナイチンゲールはこれらの特別食を料理するために自費で台所を設立した<sup>75)</sup>。そのことにより、入院患者に対して適切な食事が供給されるようになった。

混乱の度合いが増すようになると、医師達はナイチンゲールと対立している余裕がなくなった。という前に彼女達の手伝いがなければ患者を助けることも不可能に近かった。状況の悪化が対立を続けさせなかった。少なくとも表面的には休戦状態になった。医師達の多くが彼女達の手を借りなければ医療活動ができないと実感する様な状況に陥ったからである。次々と送られてくる傷病兵を相手に戦場のような混乱が続き、その混乱に乗じて彼女達はいつの間にか陸軍病院の中に入っていた。ナイチンゲールは自己資金で洗濯場を作り、自己資金で衣服や包帯を調達し、病状にあった食事を作り、患者の傷の手当てを手伝い、病院を清潔にし、患者の体を洗い、換気をして新鮮な空気を患者に与え、適切な陽光が患者に与えられるようにし、夜間の見回りの強化と事実上、昼夜を徹した看病を行った。“ナイチンゲール嬢の台所”はどんなに多くの医薬よりも多くの生命を助け、そして、外科治療なしで患者の回復に寄与することができたのである。そして、イギリス国民の何人かは、彼らの衛生とモラルを通して来たるべき世代の為に兵士の食物の改善を予測できるようになった<sup>76)</sup>。

ナイチンゲール達の働きは目覚ましかった。夜間、ランプを持って見回る彼女達に兵士達は感謝の涙を流した。ほとんど人間らしい扱いを受けなくて惨い状況の中にいた兵士達は自暴自棄となっており、心は荒み大酒のみが多かった。兵士達の家族に代わって必死になって看病をし、夜間になるとランプを持って巡回をするナイチンゲール達は実際、天使のような存在であったろう。ナイチンゲール達の看護が兵士達に生きる勇気を与えたのである。

陸軍との対立や傷病兵の看護の間にもナイチンゲールの本国への連絡は続けられた。1855年の1月28日付けのシドニーへの手紙には、食料の供給や備品や衣類の支給といった日常的な手順が円滑

に行われるようにする必要があると述べている。難しい規則が存在する軍隊ではそこに品物があっても、上官の命令なしには何一つ事が運ばないのである。規律や訓練で鍛え上げられた従順な身体と精神は、命令以外のことには従えなかった。物資不足もさることながら、供給に関するシステムのありかたが大切な兵士の命を奪っていた。彼らの精神は人の生命に関わる重大な問題より、規律を破ることによって秩序が保たれず、混乱をきたすことを恐れた軍律と、その軍律を破ることにより、自身に向けられる罰則に恐れを抱いていたのであろう。ナイチンゲールの強烈な個性はその規則を打ち破った。彼女の知性は何が優先されるのかという問いをもたらし、その問いは知性を目覚めさせ、現実的な判断をせよと彼女を促したのであろう。目の前にある規則という壁は、ナイチンゲールの責任下で破られ物品管理倉庫のドアは開かれた。

ナイチンゲールの管理者としての能力は多くの兵士達の命を救い、着実に成果を上げつつあった。物品管理問題もナイチンゲールの力で中央システム化が進み、非常時でも混乱なく円滑に供給ができるようになった。本国から衛生委員会がやってきて至る所に換気口が取り付けられ、浄化が為された。最初に悪臭の原因になっているものが取り除かれ、空気流通のための開口部が作られ、悪臭がなくなった。そして、病院の内部は徹底的に清潔になった<sup>77)</sup>。戦争が終わる頃には基地に静けさと快適さがもたらされた。

『ヴィクトリア朝時代の偉人たち』を書いたストレイチャーは「汝この門に入るべからず」との引用文を入れ、病院が死への入り口であった<sup>78)</sup>と述べた。ナイチンゲールも同様な指摘をしているが、実際、基地の総合病院は、決して患者が回復する場所ではなかった。兵士達は総合病院への入院が決定すると、死の宣告が為されたと考え、絶望したほどであった。マーティノウも著作の中で、かつての戦争では、兵士達が総合病院に入院するということは死ぬためであると言われていたと述べ、この戦争では、総合病院がどんな場所に設立されようと健康を回復することが現在、間違いなく証明された<sup>79)</sup>と述べている。なんという場面の変化があったことか、あらゆる患者のニーズと食味が考慮されるようになった時、彼らの身体の回復と同程度、彼らの心も癒された！そして病棟での死は珍しくなった<sup>80)</sup>。ナイチンゲール

ル達の活動は病気の回復のみならず、兵士達に人間らしい心を取り戻させたのである。彼等は酒を止め、給料を家族に送るほどの心の平静さを取り戻した。彼女達の看護が今にも消えそうな生命に新しい生命を吹き込んだのである。戦争が終わる前に東部駐屯のイギリスの兵士達は、衛生条件の改善で自国のどんな階級の男性より優れた兵士になっていた<sup>81)</sup>。

ナイチンゲールは、後に“看護とは一つの技術 (art) である”と述べたが、これらの経験も加味されてのことであろう。画家が生命のない画布や大理石を扱って命を吹き込むのが芸術 (art) であるとしたら、画布や大理石でない生身の最も尊い人間の命をよみがえらせたのだから看護は更に優れた芸術なのである。特に強調しておきたいことは、宗教的な要素の強いナイチンゲールがこの事を奇跡であると考えないで科学的に解釈しようとした事に重要な意義がある。クリミアでの2年間にわたる看護活動の中で、看護教育の必要性を感じたであろう。又、きちっと教育をしておけば女性であっても社会で有用な存在になれると確信したに違いない。1858年、ナイチンゲールはこの時の看護活動を『女性による陸軍病院の看護』<sup>82)</sup>に総括している。

ナイチンゲール達のクリミアでの活躍が新聞紙上で報道され、彼女は一躍時代の英雄となり、“クリミアの天使”として後の世まで語り継がれる伝説的な女性となったのである。しかし、彼女の心の中には無念の思いのみが残った。兵士達に対する心憎いまでの優しさを込めた看護活動の中でも、その背後では常に軍医達との熾烈な闘争は続いていた。彼等の無理解と技能不足のために助けられる人が助けられなかった。弱者に対する優しい心の一方でナイチンゲールは、時の軍医たちと彼らを統率する立場にある陸軍の権力者に対して執念のような闘争心を内に秘めて帰還したのである。1856年、彼女は日記に「辛抱強かった私のかわいそうな人たちよ。私は今、クリミアの墓に眠るあなた方を残して自国に帰る悪い母親です。今思うと助けられたかも知れないのに？ 6ヶ月間に8連隊の73%が病気で死んだなんて！」<sup>83)</sup>と書いた。

クリミアでの医療体制は完全に崩壊していた。8連隊の73%が病気で死んだという事実、その兵士たちを助けられず、クリミアの墓に置き去りにしたまま母国に帰るといふ罪悪感、これはナイチンゲールの心を大きく捕らえていた。兵士達の死

は陸軍の怠慢がもたらしたものであり、システムがなくなっていなかった。それは人災である。ナイチンゲールは陸軍の改革を決心し、彼等の墓前に誓ってクリミアを後にした。1861年12月付けのアトランティック・マンスリー『病院の衛生』<sup>84)</sup>には、クリミアにおける新聞記事が挿入されている。その中で、システムの愚かさによる病院での死亡率について言及され、他の男性達の過ちの結果によって、勇敢な男性達が結果的に全て負担を背負った<sup>85)</sup>と総括された。ナイチンゲールは兵士達との約束の実現のために、陸軍の改革と同時に、戦時中の傷病兵の看護を行う女性を平時から訓練、教育を行って組織付けておく必要があると考えたのであろうか。クリミアから帰還したナイチンゲールは、隠遁生活に入った。

### ■ 家族からの自立とその評価

人は誰でも家族から自立し、社会的適応の過程を踏む。そして、その過程における職業選択の自由と自己の幸福追求権は人間の基本的人権であり、男女を問うものではない。看護師になろうと一大決心をしたナイチンゲールであったが、そこで大きくぶつかったのが、彼女の母親や姉が何の拘りもなく受けいれている上流社会の伝統的な慣習であり、社会規範という厚い壁であった。女性であっても男性同様理想を求めて生きて行くべきであるとの考えは、今日から考えると何等矛盾のないものである。しかしながら、労働者階級の婦女子が好むと好まざるに関わらず働かなければ食べて行けなかったこの時代、上流社会の女性にも別な意味で過酷な運命が待っていた。これは労働者階級の婦女子に比べれば引き合いに出せるほど深刻なものではなかったのかもしれないが、彼女達にもその人生における選択権はなかったのである。

しかし、家族との長い対立の期間は決して無駄ではなく、精神的危機状況から脱出したとき、ナイチンゲールはこれらの経験を多くの学びにした。ナイチンゲールは女性達の知識に対し危惧感を示し、知識は有しても実践の伴わない女性達は、斜めにたっている状態であると辛辣に批判した。知識というものは単に有している事が必要なのではなく、実践するために必要であった。当時の女性達が受けいれている“愛のない生活と目標のない日々の活動”は、彼女にとって耐えられない事であった。理想的な生活を追求するというナイチ

ンゲールの高邁な感情は、家族との長い対立を続けさせ、彼女の繊細な神経を脅かした。が、しかし、その強情ともいえるほど忍耐強さは彼女を勝利へと導き、自立への一歩をはじめたのである。ナイチンゲールは、勤労の精神こそが自己を守る唯一の手段であると考えた。男性にしても女性にしても自分の力で生きていく必要があり、それは健全な勤労の精神でもたらされるものであった。彼女は「さあ、怠ける事に忙しい英国の女性達をドイツで行われていることに目を向けさせよう。そこには生き生きとした仲間達が主キリストを中心として働いているのではないか。」<sup>86)</sup>と女性達に呼びかけた。そして、彼女は女性達に生き生きと活動をする事を勧め、身をもって実践したのである。そして、ナイチンゲールは、その看護活動を通して悲惨な労働者階級の実態を目撃したのである。彼女にしてみればそれは、イギリス社会の恥部であった。

人間の尊厳とはまさに、他人の目的のための手段でなく、自分自身の目的に自分自身をおかねばならない。ナイチンゲールが求めてやまなかったこと、それは「情熱、知性、倫理的行動」<sup>87)</sup>を有した女性が社会で活躍できることであった。彼女のもつ知性はじっくりと社会を観察し、分析し、自己の能力を慎重に考えた末に、自身が今、まさにしなければならない事は病人の看護であり、それこそが、神の道につながる仕事であり、道徳的行為であった。その意志決定は彼女の知性を持ってなされ、その情熱はその信念を貫く事につながった。それは従来女性が決して果たし得なかったものであり、ストレイチャーが『ヴィクトリア朝時代の偉人たち』の一人としてナイチンゲールを登場させた所以であろう。ナイチンゲールを偉人として取り上げながらも、ストレイチャーは、ナイチンゲールが自立した際に、母親が目には涙を一杯にして、私たちは野生の白鳥を生んだアヒルです<sup>88)</sup>と言った言葉に対して、「白鳥を生んだなんてとんでもない、彼女は実は鷺だったのだ」<sup>89)</sup>と皮肉を込めて評した。それは男性にも劣らぬナイチンゲールの意志力と決断力と遂行能力への脅威の感情吐露とも思える。

エドワード・クック<sup>90)</sup>は、「フローレンスはイプセンに似た考え方をしていた。」<sup>91)</sup>と述べている。イプセン<sup>92)</sup>はデンマーク人の父親とドイツ人の母親を持つ、ノルウェー出身の世界文学史上有名な小説家である。彼の『人形の家』は1879年

の作品であり、一人の人間として目覚めた女性が自立していく様子を描いた作品である。女性の権利運動が密やかに主張される中で、当時としては衝撃的な作品であった。この作品は、明治時代、わが国にも森鷗外<sup>93)</sup>によって紹介されている。主人公ノラの女性としての生き方、つまり母親である前に一人の人間でありたいという考えは、確かにナイチンゲールの考えと類似している。イブセンの作品が世にでたのは1879年であり、ナイチンゲールが家族との闘いの後に自立したのは1853年の事である。それは『人形の家』の出版年より、20年以上も前のことだ。従って、時系列で語るとしたら、イブセンの方がナイチンゲールに似ていたといった方がむしろ正しい。つまり、イブセンが自己の小説に時流の文化的思想を反映させたと考えたほうが妥当であろう。しかし、ナイチンゲールはこのイブセンの事は良く承知していたらしく、彼女の著作の中にも引き合いに出して述べている箇所がいくつかある。

ヒューは『ナイチンゲールとミルとの論争』<sup>94)</sup>で、ナイチンゲールは“鉄の意志”を持った女性であったと述べ、ナイチンゲール自身が意識しているようにしてまいと彼女は、実践的女性解放運動の筆頭に掲げられる女性であると評価した。

又、社会学者トレヴェリアンは、従来の伝統的な理想的女性像、即ち、有閑無為の中であって男性に保護されなければ生きて行けないような弱々しい女性が従来の理想的女性像であったが、ナイチンゲール以降、何か社会に貢献する女性が理想的な女性像であるという社会的評価をもかえた<sup>95)</sup>と述べている。

オーギュスト・コント<sup>96)</sup>の言葉「生活は心を目覚めさせて問いを抱かせ、心は知性を目覚めさせてその問いに答えを要求する。」<sup>97)</sup>という言葉を用いたナイチンゲールの真意は、実際に存在する問題を現象学的認識論で受け止め、キリスト教的道徳論で行為する。したがって、現存する問題は、認識するのみにとどまらず、解決の一助となりうる実践が求められる。そのことが社会的有意であったとき有徳なのであった。イギリス経験認識論を引き継いだと考えられるナイチンゲールは、現実社会の観察で得られた情報とその分析から、広くイギリス社会を見聞した結果が、分析統合されて行為に現れたものである。

デューイは『民主主義と教育』の中で社会的に有用な様に教育されることは道徳教育であると述

べている。彼によれば、道徳は行為に関するものであるから、精神と活動との二元論が道徳論に反映されるとしている。つまり、精神は内的なものであり、その結果としての活動は外的なものである。道徳は個人の意識や意思に関係していると考えられ、個人の善なる意志が行動につながったときに、道徳的な行動になり得る。人間がその生涯を全うするには個人の価値観というものが大きく左右すると思うが、ナイチンゲールによって示された徳は不必要なものではなく、むしろ積極的に模範を示していくことが求められる。

## ■ おわりに

本稿では、前稿における検証結果を踏まえて、自身の主張と対立する家族との闘いから自立へのプロセスを通して、行為の源としてのナイチンゲールの思想をさらに探究した。

良妻賢母主義が主流のイギリス社会において、裕福な家庭に育ったナイチンゲールは、その家族背景及びその友人・知人達との幅広いを通してあらゆる思想的・学術的学びができる環境が整えられていた。そして、島国であったイギリスの宗教的・社会的・政治的変動は、プラトン主義の新たな復活を促し、人間理性の働きに基づく経験論的認識論が出現した。その後、真理と善なるものとは究極的に一致するとの立場を探究するケンブリッジ・プラトニストたちは、プラトン主義とキリスト教とを結びつけ、宗教的対立を解決する手段にしようとした。ロックの哲学は経験論的認識論の立場による合理主義的思考が、哲学の分野から自然科学の分野に広がるにつれて、伝統や宗教的制約から脱却して個人の合理的主知主義的判断に基づく自由の要求が高まった。

こうしたイギリス社会の思想的影響を直接的に受けたナイチンゲールは、成長・発達段階において、信仰こそが魂の真の目であり、耳であると述べた。神の存在と日常生活の様々な現象とが、神との一体感の中で生まれるものであると感じ、真実の目は真理の探究につながるというのが、ナイチンゲールの導き出した結論であった。それはまた、当時の宗教に対する社会の認識を否定し、キリスト教を受け入れながらも、彼女独特の宗教観を形成する契機にもなった。それが自身の望んだ理想的生活、それはキリストの教えを実践する神の僕としての生き方であり、その実践が看護で

あった。

ナイチンゲールは自立直後の慈善病院における日常業務での経験と観察からすぐに問題を見つけ出し、解決へと導いた。クリミア戦争における兵士の死亡率や兵士の待遇問題では陸軍のシステムと医療体制の不備を指摘し、ここでも大きな改革のための働きをした。一つの目標を設定したら、その目標に向かって邁進する行動主義的要素は一步も譲らない。兵士達の死は陸軍の怠慢がもたらしたものであり、それは人災であると確信したナイチンゲールは陸軍の改革を決心し、彼等の墓前に誓ってクリミアを後にしたのである。この後の陸軍の改革に関することは次稿に譲る。

ナイチンゲールの行為の背景には常に女性の人格の問題、兵士を含めた労働者階級などの弱者に対する人道主義的思想があった。そして、自身も、優れた理想と高邁な感情に対して共感する気品ある計画を持った生活を実践することにあった。それは伝統的な規制の中で、与えられた役割をそのまま柔順に受け入れ、男性の力に頼って生きていくのではなく、自分の一生は自分で責任を持つという事であった。そこに彼女の言う人格の問題があった。彼女の主張は“最大多数の最大幸福”で有名なベンサム の主張と類似している。彼の主張は人間の基本的な人権である幸福追求権の原点で

あった。そして、女性が自己の生涯を考えた上で、自分でその生き方に対して責任を持ち、自分で自己の一生に対して計画を立て、その中で生じる生活事象上の問題を、自己の力で解決していくことができるようになった時始めて、女性は自立できたのであり、人格を持つことができるのであった。そして、彼女の改革の手法は、実際に起きている現象をそのまま受け入れるのではなく、科学的な根拠を持って物ごとを観察し、認識し、統合した結果、適切に行為する科学的な過程である。それは真実の目は真理の探究につながるというイギリス経験認識論の立場である。

これらは、自己の経験、家族との対立、精神的危機とその克服の経験から学んだことであり、過ちは二度繰り返さない、ころんでもただでは起きない、あるいは七転び八起きの精神の持ち主となり得た根源であろう。ナイチンゲールは誰よりも“Learning to learning 学習（経験）したことから学習する”の精神の持ち主であった。したがって、いかなる経験も彼女にとって無益なことはなかった。ナイチンゲールが、家族との対立で精神的危機的状況を克服した時、自己に内在する能力と向き合え、真に一人の人間とし自立が可能となったのであろう。

## 注

- 1) イマヌエル・カント (Immanuel Kant 1724-1804)；ドイツの哲学者。ケーニヒスベルクに生まれる。同地の大学に進み神学・哲学を学ぶ。後、1746年にケーニヒスベルク大学の私講師になり、1755年に同大学の論理学・形而上学の正教授となる。
- 2) 佐々木秀美著；ナイチンゲール教育思想の源流，pp42-67，看護学統合研究，Vol.12，No.1，2010年。
- 3) ジェレミー・ベンサム (Jeremy Bentham 1748-1832)；イギリスの哲学者，法学者，社会改革家である。最も有名な功利主義者である。彼はあらゆる行為と立法の適切な目的は“最大多数の最大幸福である”と説いた。1792年にフランス共和国名誉市民になり多数の著書を発刊して経済・政治を説いた。
- 4) J・R. デインウィディ著，永井義雄訳；ベンサム，p181，日本経済新聞社，1993年。
- 5) ナイチンゲール氏 (William Edward Nightingale 1794-1874)；ナイチンゲールの父親，ケンブリッジ大学を卒業。国会議員を目指したが，落選。地方貴族としての役割を果たしながら，子供達の教育に専念した。
- 6) Stanley Weintraub; Victoria (平岡緑訳：ヴィクトリア女王 (上・下巻)，中央公論社，1993年。)
- 7) エンゲルス著，全集刊行委員会訳；イギリスにおける労働者階級の状態，大月書店，1992年。
- 8) フランシス・ベーコン (Francis Bacon 1561-1625)；ケンブリッジ大学で法学を学んだ後，ジェームズ I 世の時，Lord Chancellor となったが，汚職のかどによって追放され，一時，ロンドン塔に幽閉された。その後は，研究と著作に没頭した生涯を送った。彼の思想は，全ての真理性の探究を人間の経験論的認識に求め，経験的実証によって実在を明らかにしようとするものであり，従来の演

- 釋的方法を退け、経験と実験によって真理性を問う帰納法を提唱した。
- 9) 塚田理著；イングランドの宗教—アングリカニズムの歴史とその性質, p177-178, 教文館, 2004年.
  - 10) ジョン・ロック (John Lock 1632-1704)；イギリス経験論の代表的哲学者. 近代民主主義の代表的思想家の一人. オックスフォードにて医学と哲学を学ぶ. ピューリタン革命, 王政復古, 名誉革命と激動していく時代に生活し, 人民主権に基づく代議的民主政治の理論を基礎づけることによって, 名誉革命の指導的理論家になった. 医師でもあり, ホイッグ党初代党首, シャフツベリー伯爵と親交を結び, 政治的にもその生涯を共にした. 著作『教育に関する考察』は有名.
  - 11) 塚田理著；前掲書9), p244.
  - 12) フレデリック・ウィルヘルム・ニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche 1844-1900)；ドイツの哲学者. キリスト教倫理思想を弱者の奴隷道徳とし, 強者の主人道徳を説き, この道徳の人を「超人」と称し, これを生の根源にある権力意志の権下と見た. また, 伝統的形而上学を幻の背後世界を語るものとして否定し, 神の死を告げた人物である.
  - 13) マシュー・アーノルド (Matthew Arnold 1822-1888)；イギリスの詩人, 批評家. トマス・アーノルドの息子. 『教養と無秩序』などでイギリス国民の清教徒的偏狭を攻撃してギリシャ精神の必要を説き, 文芸批評から文明批評に至った.
  - 14) マシュー・アーノルド著, 石田憲次訳；文学とキリスト教義—聖書のより良き理解のための試練—, あぼろん社, p326, 1982年.
  - 15) マシュー・アーノルド著, 石田憲次訳；前掲書14), p326.
  - 16) Sir Edward T. Cook; The Life of Florence Nightingale, (中村妙子他訳；ナイチンゲール [その生涯と思想 I ], p75, 時空出版, 1993年.)
  - 17) Florence Nightingale (1851); The Institution of Kaiserswerth on the Rhine for the Practical Training of Deaconesses, under the Direction of the Rev, (湯楨ます他訳；ナイチンゲール著作集第一巻, カイゼルスウェルト学園によせて, p3-4, 現代社, 1983年.)
  - 18) Florence Nightingale (1888); To her nurses (湯楨ます他訳；ナイチンゲール著作集第三巻, 看護師と見習い生への書簡, p426, 現代社, 1985年.)
  - 19) フェヌロン著, 志村鏡一訳；女子教育論, 明治図書出版, 1974年.
  - 20) フランソワ・ド・サンニャック・ド・ラ・モード・フェヌロン ((Francois de Saligmac de La Mathe Fenelan 1651-1715)；フランスの聖職者作家. 彼は新カトリックの長としてプロテスタントの子女をカトリックに改宗する事, また既に改宗した子女達を再教育する事を任務としていた.
  - 21) ハンナ・モア (Hannah More 1745-1833)；父親は慈善学校の校長. 姉妹達と協力して学校を運営しながら, 文筆活動で名声を博し, 自力で財産を築きあげて, ブルーストッキングのメンバーとなり, 博愛主義をつなぐ輪として女性史上注目される. その一生は宗教的忍従と慈善を女性の義務の第一と考え実践した.
  - 22) メアリ・ウルストンクラフト (Mary Wollstonecraft 1759-1797)；フェミニスト. 結婚後は Godwin. 職業を持つことにより, 女性も依存の生活から脱却し, 男性と平等の立場にたつと主張した.
  - 23) ハリエット・マーティノウ (Harriet Martineau 1802-1876)；英国の女流小説家, 経済学者. デイリー・ニュースの主筆をしていた. 彼女は情報や知識を小説の形で出すことを思いつき, 数多くの物語を書いて政治や経済や救貧院の話などを解りやすく解説して好評を得た. 『フローレンス・ナイチンゲールの生涯』セシル・ウーダム・スミス著より
  - 24) ジョン・スチュワート・ミル (John Stuart Mill 1806-1873) イギリスの哲学者, 経済学者. ジェームズ・ミルの息子. ベンサムの助言に基づき父ジェームズ・ミル (James Mill 1773-1836) によって早期教育を受ける. 『経済学原論』や『自由論』を書いて, 私有財産制や経済的自由を擁護しつつもその限界を認め, また自由を経済的自由からよりも精神的自由から根拠付けて, 自由主義に新しい展開を与えた.
  - 25) ハリエット・テラー (Harriet Taylor 1807-1858)；夫のテラー氏死亡後, ミルの妻になる. ミルが1869年に執筆した『The Subjection of Women (日本では女性の従属として翻訳されている)』は



彼女の協力によるといわれている。

- 26) シャーロット・ブロンテ (Charlotte Bronte 1816-1855) ; イギリスの女流作家. 1835年母校のロウ・ヘッドの教師になったが, 辞めて家庭教師になる. しかし, これも直に辞めてしまう. エミリー (1818-1848), アン (1820-1849) の三姉妹で自分達の学校を作るつもりであったがこれも失敗した. 代表作『ジェーン・エア』
- 27) エリザベス・ブラックウエル (Elizabeth Blackwell 1821-1910) ; アメリカ初の女性医師. イギリス, エイヴァン州ブリストル生まれ. 様々な医学校に入学申し込みをするが断られ, ニューヨーク州のジェネバ医学校に入学, 1949年に卒業. 後, ヨーロッパへ行き, パリ産院, ロンドンの聖バーソロミュー病院で働く. 1851年にナイチンゲール宅を訪問し, 病院や看護師の問題に関して話し合っている. 同年, ニューヨークに戻り, 開業して成功する. 1869年からイギリスに在住し, ロンドン女子医学校を創設した. 妹にエミリーという世界初の女性外科医がいる. 彼女もロンドン女医学校の教授となるなど, 姉の事業に協力した.
- 28) Florence Nightingale (1860); Note on Nursing, p165, Scutari Press, 1992.
- 29) ブレースブリッジ夫妻 (Charles H Bracebridge & Serina Bracebridge) ; 有名な旅行家. 夫のチャールズはギリシャの解放運動に熱を入れており, トルコへの反乱にも加担した. アテネに地所を有し, 子どものいない夫妻は多勢の客をもてなした.
- 30) テオドール・フリードナー (Pastor Theodor Fliedner 1800-1864) ; プロテスタントの牧師. ドイツのカイゼルスウェルトに赴任した際に, 人々が経済的に苦境に陥っていたため, 救済資金を求めてイギリスに足を伸ばした. そこでエリザベス・フライ女史の女囚保護事業活動を知ってドイツに広めようとした. その一環として1836年に看護師の養成所も含めたカイゼルスウェルト学園を創立した.
- 31) エリザベス・フライ女史 (Elizabeth Gurney Fry 1780-1845) ; 有名な社会改革者. クェーカー教徒.
- 32) ヨジアス・ブンゼン男爵 (Josias von Bunsen 1791-1860) ; プロシアの大使. ヨーロッパ中にその名を知られた聖書学者であり, エジプト学者としても知られている. 英国の良家の娘と結婚し, 巨万の富を有し, 女王やアルバート殿下とも親しい熱心な福音主義者. ナイチンゲールは彼の家に良く出入りし, 書物を借り, 考古学や宗教を語り合ったとされる. セシル・ウーダムスミス『フロレンス・ナイチンゲールの生涯』より.
- 33) アルバート殿下 (Prince, Albert 1819-1861) ; ヴィクトリア女王の夫君. ドイツ・ザクセン・コーブルグ・ゴータ公爵の次男. 彼の政治的助言は先見の明があったが, ドイツとのつながりがあり, 政府や国民の不信があったために強い影響力は及ぼせなかった. 1851年は大英博覧会を計画・運営した. ケンジントン公園に記念碑がある.
- 34) Cecil Woodham-Smith (1950); Florence Nightingale, (武山満智子他訳; フロレンスーナイチンゲールの生涯 [上巻], p89, 現代社, 1987年.)
- 35) ミセス・ブレースブリッジ (Serina Bracebridge 1800-1874) ; ナイチンゲール家の人々はその名をシグマという愛称で呼んだ. ミセス・ブレースブリッジはナイチンゲールを自分の人生の中心に捉え, 情愛を注いだ. ナイチンゲールの精神的危機のとき, 彼女は命綱であり, クリミアの時も一緒に行動した.
- 36) メアリー・クラーク (Mary Clarke Mohl 1793-1883) ; 子ども時代から成人するまで各地を転々とするが, レカミエ夫人の支援により, パリに“クラークキー”という最も優秀で知的なサロンを持った. 特にヘンリー・ボナハム・カーターや文学者たちと親密な交友関係を持った.
- 37) シドニー・ハーバート (Sidney Herbert 1810-1861) ; クリミア戦争当時の戦争大臣. ナイチンゲールの生涯のパートナーであり, 良き理解者, 協力者である. 名門ペンブルック伯爵家に生まれ, 政治家となった人物. 1852-1855, 1859-1860に陸軍大臣を務め, ナイチンゲールの改革を推進した. しかし, 激務のため病気になる, 公務からの引退を希望するが, ナイチンゲールはそれを許さなかったといわれている. 辞職後に病死.
- 38) チャールズ II 世 (Charles II 1630-1685) ; イギリスおよびアイルランドの国王 (1660-1685). チャールズ I 世の息子, 清教徒革命で皇太子として, 父親の側にたち追放される. 父の処刑によって国王

- を名乗り、スコットランドで即位（1651）、軍を率いてイングランドに攻め入り惨敗。9年間の追放の後にイングランド国民によって飛び戻され、1660年に復権した。
- 39) アンソニー・アシュレイ・クーパー・シャフツベリー伯爵 (Anthony Ashley Cooper Shaftsbury, 1st Earl 1621-1683)；政治家。ケンブリッジ大学に学び、短期議会（1640）、指名議会（1653）に選出され、クロムウエルの国策会議の一員になるが、1655年に野に下る。王政復古で男爵に叙され、大蔵大臣、政治顧問団の一員、伯爵、大法官となる。1673年に罷免された。ヨーク公ジェイムズの王位継承反対派を率い、反逆罪で告発され、1682年にオランダに亡命した。ロックはこのシャフツベリー伯爵の主治医であった。
- 40) ウィリアム・ランプ・メルボン卿 (Lord William Lamb Melbourne 1779-1848)；イギリスの政治家。1835-41年まで首相を務めた。
- 41) ヘンリー・ジョン・テンプル・パーマストン卿 (Henry John Temple Palmerston 1784-1865)；英国の政治家。彼は英国外交政策を30年間にわたって支配し、1855-1858年、1859-1865年の間自由党内閣の首相。
- 42) ロバート・ピール (Sir Robert Peel 1878-1850)；イギリスの政治家。グレー内閣の選挙法改正に反対して首相となったが、閣僚の反対にあって辞職し、再任してその撤廃を実現し、イギリスの自由貿易の基礎を作った。
- 43) Florence Nightingale (1851)；前掲書17)
- 44) Florence Nightingale (1851)；前掲書17), p18.
- 45) ゼーレン・オービエ・キルケゴール (Soren Aabye Kierkegaard 1813-1855)；デンマークの宗教思想家。真のキリスト者を求め、信仰によって神の前に立つ人であり、そこに真の人間の生き方がある。人間は常に真の自己たらんと欲する限り、永遠者を求めて努力する必要がある、その努力の過程が実存するという事である。
- 46) キルケゴール著、斎藤信治訳；不安の概念, p208, 岩波文庫, 1991年。
- 47) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale (1860); Cassandra/Suggestions for Thought, Pickering & Chatto Limited, 1991.
- 48) 長谷川敏彦監修；ナイチンゲール, 小学館, 1997年。著作の最後にナイチンゲールが残した言葉として引用されている。出典は『看護覚え書』
- 49) Martha Vicinus & Bea Nergaard Edited; Ever Yours, Florence Nightingale Selected Letters, p44, VIRACO PRESS, 1989.
- 50) Mary Poovey Edited；前掲書47), p232.
- 51) Martha Vicinus & Bea Nergaard Edited；前掲書49), p56.
- 52) ミセス・ハーバート (Elizabeth Herbert 1822-1911)；シドニー・ハーバートの妻であり、夫と共に常にナイチンゲールに協力した。彼女はナイチンゲールが働いていた婦人病院の委員でもあった。
- 53) Martha Vicinus & Bea Nergaard Edited；前掲書49), p65.
- 54) 小池滋著；英国流立身出世と教育, p95, 岩波書店, 1993年。
- 55) ビンコフス博士 (Dr Peter Pincoffs)；彼は民間医の立場でスクタリの病院に働いていた。ナイチンゲールとはその時知り合ったものといわれている。1857年に『Experiences of a Civilian Medical Hospitals』を書いている。ナイチンゲールは1857年5月27日づけの手紙でその著作は非常に価値があるので早く出版されることを期待すると述べている。
- 56) ザカリイ・コープ著、小池明子他訳；ナイチンゲールと医師達, pp214-215, 日本看護師協会出版会, 1979年。
- 57) Mary Poovey Edited；前掲書47), p95.
- 58) Martha Vicinus & Bea Nergaard Edited；前掲書49), p75.
- 59) Sir Edward T. Cook (1914)；前掲書16), p209.
- 60) ジョン・ヘンリー・ニューマン (John Henry Newman 1801-1890)；イギリスの宗教家。オックスフォード運動の中心的人物。オックスフォード大学に学び、1824年にイギリス国教会の聖職者となっ

- た。ハレル・フルードやジョン・キーブルらの高教会思想の影響を受け、それまで抱いていた自由主義的思想を捨て初期キリスト教の研究に携わった。
- 61) オックスフォード改革運動；ウィリアム・ハミルトン (William Hamilton) が1831年に出版した『オックスフォード改革論』によってオックスフォード改革運動 (1833-1841) の口火が切られ、ニューマンを指導者とするカトリック主義のオックスフォード改革運動がこれに続いた。ニューマンは最初国教会の司祭であったが、オーリオル学寮派の自由なる神学思想に影響を受けて、教会史の研究などから次第にオーリオル派の主知主義 (intellectualism) 的傾向に不満を覚えた。彼はフルード (James Anthony Froude) やキーブル (John Keble) などの高教会思想に接近し、彼らと共に宗教に干渉する政治上の自由主義に反対するため、宗教に対する世俗の権力の介入を阻止し、イギリス国教会を初期教会の精神に基づいて改革しようと1833年に行動を起こした。
  - 62) Sir Edward T. Cook (1914)；前掲書16), p328.
  - 63) 柴田京子, 津田右子, 佐々木秀美共著；ナイチンゲールの宗教観に関する若干の考察—友人アーサー・ヒュー・クラフとの関わりをてがかりに, 総合看護, Vol.40, No.3, pp41-58, No.4, pp73-80, 2005年.
  - 64) Sir Edward T. Cook (1914)；前掲書16), p328.
  - 65) Sir Edward T. Cook (1914)；前掲書16), p230.
  - 66) ジョン・ホール博士 (Hall Sir John MD 1795-1866)；英陸軍遠征軍の軍医長官。1854年に総司令官ラグラン卿の命令により、スクタリの病院の視察をするべく派遣されたが、全てがうまくいけるとの報告書を書いた。後にナイチンゲールから真実の報告があり、両者間で熾烈な戦いとなった。
  - 67) Litton Strachey; Eminent, Victorians, Penguin Books, 1986.
  - 68) Litton Strachey；前掲書67), p119.
  - 69) Harriet Martineau; British History and Military Reform vol.6, England and her Soldiers, p95, Edited by Deborah Anna Logan Pickerring & Chatto, 2005.
  - 70) Harriet Martineau；前掲書69), p95.
  - 71) Harriet Martineau；前掲書69), p92.
  - 72) Harriet Martineau；前掲書69), p94.
  - 73) Harriet Martineau；前掲書69), p70.
  - 74) Harriet Martineau；前掲書69), p93.
  - 75) Harriet Martineau；前掲書69), p98.
  - 76) Harriet Martineau；前掲書69), p316.
  - 77) Harriet Martineau；前掲書69), p116.
  - 78) Litton Strachey；前掲書67), p119.
  - 79) Harriet Martineau；前掲書69), p118.
  - 80) Harriet Martineau；前掲書69), p117.
  - 81) Harriet Martineau；前掲書69), p316.
  - 82) Florence Nightingale (1858); Subsidiary Notes as to the Introduction of Female Nursig into Military Hospitals (湯楨ます他訳：ナイチンゲール著作集第一巻, 女性による陸軍病院の看護, 現代社, 1983年.)
  - 83) Martha Vicinus & Bea Nergaard Edited；前掲書49), p171.
  - 84) Harriet Martineau；前掲書69), p226.
  - 85) Harriet Martineau；前掲書69), p236.
  - 86) Florence Nightingale (1851)；前掲書17), p34.
  - 87) Mary Poovey Edited；前掲書47), p208.
  - 88) Litton Strachey；前掲書67), p83.
  - 89) Litton Strachey；前掲書67), p15.
  - 90) エドワード・クック (Sir Edward Cook)；ナイチンゲールの死後始めて公認されたナイチンゲール

伝記作家。

- 91) Sir Edward T. Cook (1914) ; 前掲書15), p134.
- 92) ヘンリック・イブセン (Henrik Ibsen 1828-1906) ; ノルウェーの劇作家。代表作に『人形の家』がある。彼自身がノルウェーを嫌い、長ドイツやイタリアで生活したため、当時のノルウェーの国民作家という意識は薄かったが、現在は国の象徴として世界史上もっとも重大な劇作家として尊敬されている。
- 93) 森鷗外 (1862-1922) ; 本名、林太郎 (りんたろう)。石見国津和野 (現島根県津和野町) 出身。東京帝国大学卒。大学卒業後、陸軍軍医になり、官費留学生としてドイツで4年過ごした。帰国後、訳詩編『於母影』、小説舞姫』、翻訳即興詩人』などを発表。また自ら文芸雑誌『しがらみ草紙』を創刊して文筆活動に入った。その後、軍医総監となった。帝室博物館総長や帝国美術院初代院長なども歴任している。
- 94) Evelyn L. Pugh; Florence Nightingale and J. S. Mill Debate Women's Rights, Journal of British Studies, 1988.
- 95) George Macaulay Trevelyan (1944); English Social History, (松浦高嶺他訳; イギリス社会史2, p451, 美鈴書房, 1988年.)
- 96) オーギュスト・コント (Auguste Comte 1798-1857) ; フランスの哲学者、社会学者、実証主義の始祖。サン・シモンの弟子。彼は、全ての科学は神学的段階から形而上学的段階を経て、実証的あるいは経験的段階にいたったものとみなし、実証的宗教においては、崇敬の対象は人間性であり、その目的は人類の幸福と進歩にあるとした。
- 97) Florence Nightingale (1888) ; 前掲書17), p176.